

「日本庭園 有楽苑について」

有楽苑へようこそ

この庭園は、17 世紀の貴重な茶室「如庵」にふさわしい場所として、名古屋鉄道によって作られた。如庵は国宝に指定されている 3 つの茶室のうちの 1 つであり、茶道建築の最高傑作とされる。1971 年、名古屋鉄道株式会社（以下、名鉄）が如庵を譲り受け、神奈川県から愛知県犬山市に如庵を移築し、この庭園が建設された。有楽苑の創設にあたっては、如庵の生みの親である茶人・織田有楽（1547-1621）の好みを取り入れた庭園を造ることを目指したのである。有楽苑という名前も、「有楽の庭」という意味である。

有楽苑の中核をなす歴史的国宝「如庵」

織田有楽は尾張国（現在の愛知県西部）で、犬山城を築いた有力武士である織田家に生まれた。1618 年に隠居した有楽は、京都の建仁寺の境内に正伝院書院と呼ばれる屋敷を構えた。茶の湯を好んだ有楽は、邸宅に隣接して茶室を設計・建築した。この茶室を「如庵」と名付けた。

この茶室とその周辺の建物は、明治時代（1868-1912）まで京都に残されていた。その後、建物は所有者が変わり、何度か移転した。最終的に、如庵と正伝院書院の一部は三井家が取得し、神奈川県大磯の私邸に移築された。

1969 年、三井家はこれらの建物を、如庵の茶庭（露地）の品々やその他多くの歴史的遺物とともに名鉄に売却した。この購入は、歴史的建造物を保存し、文化遺産を公開する庭園を建設しようという名鉄の計画の第一歩でした。

その陣頭指揮を執ったのが、名高い建築史家でもある堀口捨己（1895～1984）であった。堀口捨己は、赴任前の数十年間、如庵をはじめとする茶室に関する古いスケッチや図面、史料を丹念に収集し、如庵や他の茶室に関する著書も執筆していた。堀口はこの如庵の修復とそれを展示するための庭園づくりに携わり、ライフワークの集大成としたのである。

庭園の建設

名鉄が有楽苑を建設するのに選んだのは、犬山城にほど近い遊園地跡地であった。建設は前途多難な滑り出しであった：1971 年 5 月 18 日、堀口が名古屋に着いた時、名鉄の従業員はストライキに突入しており、バスも電車もすべてストップしていた。堀口が犬山に到着した後も、トラブルは続いた。5 月 19 日の朝、土砂降りの中、堀口は現地の様子を見に行った。堀口が東京から送った図面をもとに、この 1 週間、作業員たちは建物の位置を示すためのひもを張っていた。それを見た堀口は、「自分の設計した線と全然違う」「如庵の位置が違う」と激怒した。

翌日、急遽、修正を行い、工事を開始した。その後、堀口の指揮のもと、約一年間にわたって修復師、石工、大工が有楽の歴史的建造物を再建・修復し、庭師が生きた風景を作り上げた。

堀口は 70 歳を過ぎても、雨の中、借りた名鉄のレインコートを着て工事に立ち会うなど、精力的に活動

した。堀口は、犬山まで 21 回も通い、その都度、注意事項を書き残した。

ビジョンの実現

堀口捨己は、自然素材の特性をデザインに取り入れたことが評価されている。堀口は、最初に描いた庭のイメージに縛られることなく、岩や木の個性を生かしながら設計を進めた。

堀口は如庵の復元と庭園造成の計画を立てるにあたり、史料と 1799 年の有楽邸の絵図を参考にした。建物の位置はもちろん、垣根の形、飛び石の配置、松の木の位置、竹の種類など、すべてこの資料に基づいて決定され、当時の如庵の姿を想起させるものである。

1799 年の絵図には、石塔のある低い丘、そしてそれらを結ぶ簡単な石橋が描かれている。堀口は池を掘る代わりに、水を細かい白砂で表現した枯山水でこの風景を再現した。また、有楽の四角い月見台「嘯月台」も再現した。庭の随所に数百年前の門や石灯籠、手水鉢を配し、数十本の大木や石を移植して、歴史を感じさせる庭園に仕上げた。

有楽苑は、当初は簡単な移転・修復工事から始まりましたが、その後、庭園全体がより大きなものに成長しました。17 世紀の茶人の美的感覚、巨匠建築家の献身とビジョン、そしてこの文化遺産を次の世代のために維持する管理人のたゆまぬ努力が結集されている。